

Indian Buddhism

桜 部 建

この労作についてはすでに「佛教研究」第2号昭和47年3月誌上に渡辺文麿氏による紹介がなされている。著者ウォーダー博士については、およびこの書の内容の大綱については、就いて見られたい。その上にまたここに卑見を陳べようとするのは、ただこの六百ページに余る大著の中でわたしにとって注目を引くいくつかの論点に関してのみである。

1

シャカムニの人寿八十歳という伝承については、先にA・フーシェーが疑念を表明した(Ta vie du Bouddha, p. 322-3)。それは一つには、八十歳という数字がインドで一般に人寿を全うした場合の命数として考えられているものに合わせたに過ぎないのではないかと疑い得るということ、もう一つには、成道三十五歳入滅八十歳行化四十五年とするとその最後の十五年について佛伝の資料は何も語るところが無いということ、に基づく。そこで、八十歳入滅という伝承において、シャカムニの寿

は実際より十五年ほど引き延ばされているようだ、とフーシェーは考えた。この書の著者も「この八十歳という数字は、すでに非常に早い時代に改竄されたものではないかと疑うに足る或る理由がある」といい、実際はそれより二十年ほど差引き得るのではなからうかという推定を述べている(同、44)が、そこに挙げられる理由は、ピンビサーラ王についてバラモン教の側に伝えられる伝承と佛教の側に伝えられるそれとが相容れない、ということである。

事実、もし数字に誇張がなされたとすれば、著者の言うとおりの「非常に早い時代」のことに相違ない。そのような時代にそのような事があり得ないとは言えない。しかしそれがわれわれの推断の域以上に出るのにはあまりにも時がたち過ぎていて、と思われる。

2

インド佛教史上に複数の竜樹があったのは「十分に確かなこと」であるとすると著者は、第一の竜樹、すなわち中論偈・廻諍論・空七十論偈などの著者、をひとえに大乘の論師として見るべきではないとして、全く独自の見解を立て、次のように論ずる。

——この竜樹は大乘および大乘經典について全く闕説していない。彼が闕説している經典はすべて古三藏のそれ、特に雜阿含、であって、彼の立場は古三藏の正しい解釈を打建てようとしたものに過ぎない。彼が大乘經典の存在について闕知してい

たということすらほとんど立証し難いことである。彼は大乘佛教徒が好んで用いる「声聞」という誣称をその著作の中に一度も用いていない。彼は大乘にも小乗にも与する者でなく「中」論者である。彼は「有」の見を破し法の無自性を説くから、彼の立場がアビダルマの一般的傾向と背馳していることは明らかであるが、同時にまた、もし彼が何れか一方の立場をとったとすれば、それは彼自身の説く無自性・空の教義と背反することになる。彼はただ新古の佛教諸派を単一の佛教に統一し、シャカムニ自身の原教義に立返らしめようと意図したのであろう。

——竜樹が、彼の古三蔵理解を基として、古佛教と大乘とを統一することに、成功しなかったことは明らかである。その後アビダルマ諸派は「有自性」論を捨てなかったし、大乘者の大部分は古三蔵を卑小な教えとして菩薩の棄てて顧みざるべきものとしていた。彼の死後「中」観派は急速に大乘という一「辺」に偏し古佛教と完全に相離れることになった。彼の直弟子聖提婆すらすでに佛教を「菩薩の道」として示している、と(pp. 375-387)。

このように考えれば智度論の作者が第一の竜樹から区別されなければならぬのは当然である。著者によれば、それは提婆と並んで第一の竜樹の直弟と考えられる第二の竜樹である。すなわち名をナーガあるいはナーガボディといい、それがしばしば師の名ナーガールジュナと同一視された。ターラナータ史にナーガフヴァヤあるいはタターガタバドラとして挙げられているのがその人である。中観派と大乘經典との関連は彼の上に

おいてはじめて見出される、という(p. 388)。(著者がこの説をなす時、智度論の作者について綿密な考証をしてその中論偈の作者と別人なることを論じている、E・ラモートの智度論訳第三巻は、まだ参見されていないようである。また著者は十二門論も同じ第二の竜樹の作としているが、十二門論が中論偈の作者竜樹に帰せられていることに疑問を投じた安井博士の説(「十二門論は果して龍樹の著作か——十二門論『観性門』の偈頌を中心として——」印度学佛教学研究第六卷第一号)は参照されているかどうか)。

さらに第三の竜樹として著者は Pancakrama や Catum-dransicaya の作者たる密教の論師を挙げる(p. 488-9)。ナーガフヴァヤ(竜叫)すなわちここにいる第二の竜樹および「新」竜樹すなわちここにいる第三の竜樹について最初に関説したのは寺本婉雅「新竜樹伝の研究」(大正十五年)であるが、そこでは智度論・十二門論も十住毘婆沙論も「古」竜樹に帰せられており、ナーガフヴァヤとナーガボディとはまた別人と考えられている。わたしにはこのような点に立入る知識が全く無いが、問題の複雑さは想像せしめられる。

3

著者は世親についても複数説を採り、E・フラウワルナーの論よりさらに一步を進めている点もある。そこで著者によって無着の弟たる世親の著作として認められるのは「中辺分別論」その他無着の論に対する釈、三十頌、二十論などである。それ

らには無着の学説の外に出るものはほとんど無い、と著者は考
える。論理に関する「世親」の三著作(その中、二つのものの断片
のみ他書中の引用として現存)も、五支作法を改め三支としている
点で無着と一致しているから、無着の弟の作らしい、という
(p. 444-6)。ここでは「世親」は現量・比量のみしか認めてい
ないのに対して、俱舍論の中(一、二二六)では三量説が採られ
ているということが指摘されている(p. 473)。

さて無着の弟世親とは別人なる俱舍論の作者世親は成業論の
作者でもあり、経量部師であると断定される(p. 433)。スマテ
イシーラが成業論主を経部師としているようにヤシューミトラ
が俱舍論主を経部師として扱っていることは確かであるが、そ
れであるからといって「多くカシュミラの毘婆沙師の義理に
よって説かれ」たと明言し(Ⅳ、四〇)ている俱舍論の立場をた
だちに経量部のそれと断じてしまうことはやはり問題であろう。
俱舍論が説一切有部アビダルマの長い伝統を受けて書かれたも
のであることは全く議論の余地が無い。それがしばしば経部の
説を採って有部の伝統説を批判することは周知の事実であるが、
時には経部の説を挙げながら必ずしもそれに拠っていない箇所
もある。「部宗の撰属」はシナ・日本の俱舍学の伝統の中で久
しく論ぜられた問題であるが、その一つの結論である「理長為
宗」説が、やはり、論の内容に最も適合している、とわたしな
どには考えられる。

なお唯識派の巨匠世親と俱舍論主世親とを別人とする新古二
世親説自体に、わたしはなお従い難いものを感じる。フラウワ

ルナー説の論点で問題になる二、三はかつて指摘した(印度学佛
教学研究一ノ一、二〇五—八ページ)。

スカンディラは「明らかに」入阿毘達磨論の作者であるとい
う(p. 472)が、その認め難いことについてはかつて論じた
(校部建「入阿毘達磨論の研究」大谷大学研究年報第十八集。「塞鍵
地羅」と写された名前の原形が Skandhita であることと見るこ
とさえ、多分 S・ビールの推断に過ぎないのであって、あまり根
拠は無いし、その塞鍵地羅が「悟入」と訳され(ノ)それが衆
賢の師であることも単なる伝承の域を出ない。新出のアビダル
マディーバの作者をウィマミトラとなす(p. 472)こともま
た、その校訂者 P・S・ジャイニのあて推量以上に何ら証拠は
無い。ジャイニすら単に推測として述べているに過ぎないのを
「明らかに」そうであると決めつけるのは余りにも速断に過ぎ
よう。

4

成実論主を多聞部に属すると断ずる(p. 479)のにも問題が
あろう。吉蔵が多聞部と成実論との関連に触れていること(三
論玄義、岩波文庫本 p. 116)は古くから知られているが、彼は同
時に訶梨跋摩を「薩婆多部鳩摩羅陀弟子」ともいう(同上書 p.
12)。また p. 136)のである。著者は、成実論中の空思想が大乗

の影響を含むかどうかは明らかでないといひ、多聞部の立てる
「五音」の説、すなわち無常・苦・空・無我・涅槃寂靜の五を
「能引出離道」となす説、の中の「空」とそれとに連関を見よ

うとするが、他によほどの傍証が無い限り、いかにも無理な議論のように思われる。われわれは故高井僧正と「成実論に顕はれたる思想を此の多聞部の宗義に比較し此れを考察すべく、余りに多聞部の遺されたる教理の貧弱なるを悲しまざるを得ず」(小乗佛敎概論一〇六ページ)という感を等しうする。

馬鳴の属する部派を多聞部と決定する(p. 277, 338-40)のも肯きがたい。それは多分にE・H・ジョンストンの説に導かれているのであろうが(そして馬鳴を多聞部とするところから上述の詞梨跋摩多聞部説も出たのであろうが)、ジョンストンの説(Buddhacarita Part II, 1936, Introduction)そのものが夙に(Mélanges chinois et bouddhiques, V, 1937)批判されていること、馬鳴の所屬部派に関する他の諸説などについては金倉博士の「馬鳴の研究」(昭和四十一年、平栗寺書店)第一章にくわしい。なおそこでの金倉博士の結論は、馬鳴の立場は経部のそれに近いと見得るけれどもなお深く尋求する要がある、

というものである。

究竟一乘宝性論の作者について、著者はやはりジョンストンの説にひかれてかそれを(唯識派の註釈者安慧とは別人なる)スティラマティという人で別名をサーラマティともいうとしている。ジョンストンの説(Ratnagotravibhāga, 1950, Foreword)に対しては故宇井博士(「宝性論研究」昭和三十四年、岩波書店、九一ページ以下)のきびしい批判がある。宇井博士によれば、この論は漢訳の伝承することく堅慧すなわちサーラマティの作と見て毫も差支えなく、サーラマティをステイラマティの訛と考える要は無い、というのである。この論の内容について、著者が、論主スティラマティは「竜樹とは大いに異っているが一見中観派の人と見える」といい、その学説は弥勒に帰せられている般若經綱要 Abhisamayālakṣaṇa のそれと一致している、とするのは注目すべきことのように思われる。

(x+622p., Rs. 60.00, Motilal Banarasi Dass Delhi, 1970)